



あんげろす

「震災とキリスト教」

永野茂洋

3.11 以後 5 月の授業開始まで、何を考え、どう過ごしていたのか、担当クラスの 300 人の学生に聞いた。被災地に行って何かしたかった。でも何をどうしていいかわからず、ずっとTVのニュースを見ていた、という学生が多かった。運転免許を取りに行ったという学生も結構いた。NGO・NPO のルートを使って、2 週間、3 週間、すでに被災地で救援ボランティアをしてきたという学生も結構いた。学生の受け止め方は千差万別である。共通しているのは、この学生たちの全員が、1-2 教後には選挙その他の活動を通して、自分たちの意志を政治に反映させる最初の「ポスト 3.11」、「ポスト・フクシマ」の世代になるだろうということである。今学期、本学の「キリスト教学」のクラスでは、47 の必修・選択の全クラスで、「震災とキリスト教」というテーマを授業に組み込んでもらうことになった。キリスト教はこの大震災・原発事故をどう受け止めるのか。既成の答えがあるわけではない。ただ正面から、学生たちと真摯に議論して行ければと願っている。



第 55 号

2011 年 7 月

新任紹介

客員研究員に就任して

今村正夫

ニューヨークで忘れることのできない大きな体験をしました。

2001年9月11日、私はニューヨーク市クイーンズ区にあるラガーディア空港にいました。そこで、午前7時25分発の「アメリカンエアライン」で日本に帰る妻を見送った後、マンハッタン島アップパーイーストにあるドミトリーに戻るためにイエローキャブに乗り、午前9時頃、島内に入るクイーンズボロー橋の上で、ダウントウンの方角から黒煙が上がっているのを見ました。ドライバーと、「どげんしたとかいな」と博多弁英語で話を交わしながら、寮に戻った後、事件を知りました。

興奮しながら他の学生たちとテレビに齧り付いてCNNを観ました。ツインタワー北棟に突入して爆発炎上した1機目が、奇しくも同じ「アメリカンエアライン」ではないか！

そのとき脳裡に浮かんだのは、妻の乗ったエアラインが突入...そして、妻が死んだ...ということ。

それから一日後、ダラスで待機させられている妻の無事が日本を介して分かったとき、大粒の涙が出ました。ああ、よかった。

人間万事塞翁が馬で、さあ、これからアメリカ留学というときに、このような体験をして、人生、何が起こるか分からない。本当に大きな体験でした。

あれから10年です。この個人的な体験と、約3千人の命が奪われた衝撃的な事件も、

脳の片隅に追いやられて、一昔の出来事になりかけていたとき、同時多発テロの首謀者とされるオサマ・ビン・ラディン容疑者の死が飛び込んできました。私は内心、「うそや」と思いました。

訝しく、続けて新聞を読みました。この5月1日(米東部時間)に、米海軍特殊部隊シーブルズがパキスタンの首都イスラマバード郊外の住居で彼を殺害したとのこと。そこは地方都市アボッターバードで、パキスタン軍の施設やエリートたちが住むエリアの豪邸だということ。潜伏先が洞穴ではなく、彼は高級住宅街の豪邸にいたということ。

彼は、自爆テロを繰り返すテロリストや、イスラム貧民の精神的なシンボルになっていたそうです。しかし、本当のところは、違う。そして、その矜持もない。

バラク・オバマ米大統領は1日の声明で、愛する人を奪われた家族に Justice has been done を伝えることができると言っていました。私は「正義がなされた」のかと。相変わらず正義を持ち出して戦争を行っているアメリカの指導者の傲岸な態度を思いました。そして、9・11の事件の直後に、当時のジョージ・W・ブッシュ米大統領がその声明で、「Evil」を強調していたのを思い出しました。

さっそく、当時購入した9月12日発行の the New York Times を読み返し、ブッシュ氏が Today our nation saw evil, the very worst of human nature. そして、詩編23篇を引用して、I fear no evil, for you are with me. 最後に、None of us will ever forget this day, yet we go forward to defend freedom and all that is good and just in our world と演説したのを振り返りました。

正義や善悪は、キリスト教思想に確認できます。聖書では例えば、「人は我々の一人のように、good and evilを知る者となった。」(創3:22)「To do righteousness and justice は、いけにえをささげるよりも主に喜ばれる。」(箴21:3)キリスト教は善一元論もあります。けれども、一般には善対悪の二元論的世界観や、そこから興される正義論の方がインパクトが大きい。

5月より授業が始まります。本校の非常勤講師として、「キリスト教の基礎」の思想を担当します。正義や善悪を積極的に取り上げて、「正義」や「善悪」の話をしよう—いまを生き延びるためのキリスト教、と振って、なるほど、「マイケル・サンデルの白熱教室」とはなりません、キリスト教の「正義」や「善悪」について講じていきたいと願っています。

それから、先ほどの創世記のパッセージには、「人が good and evilを知る者となった」に続いて、「今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある」とあります。

キリスト教における死刑や自然環境破壊などの話題を通して、私の専門領域の「手を伸ばして取る」という生命・環境倫理や、研究領域の「命を食べる」という食・農の倫理の両テーマについても取り上げていきたいと思えます。もちろん、震災における「相互愛」のことも忘れません。今後とも宜しく願います。

いまむら・まさお (客員研究員・本学非常勤講師)

客員研究員に就任して

高井ヘラー由紀

このたび渡辺祐子先生のお声かけにより、キリスト教研究所の客員研究員として研究に従事する機会をお与えいただき、感謝いたします。

現在私はキリスト教史の研究に従事しております。もともと歴史に特別な関心をもたなかった自分がこの分野を専門とするに至ったことを考えると、われながら不思議な気持ちになります。ひとつだけ言えることは、キリスト教信仰という要素なしに、このことは起こり得なかっただろうということです。

私は、カトリック信者の母の影響で幼少時より小学校時代を通じてカトリック教会で信仰を培われましたが、父の仕事のために海外で過ごした中学時代にすっかり教会から離れ、帰国して入学した国際基督教大学高等学校にてふたたびキリスト教に出会いました。高校卒業時に教会を探していたところ、知り合いのマレーシア人留学生から誘われた福音派系プロテスタントの華人教会(東京国際基督教教会)に通うことになり、結婚するまでの12年間、台湾や中国など出身の青年の方々と一緒に楽しい教会生活を送りました。結婚相手はアメリカ人でしたが、彼の所属教会は日本基督教団でしたので、以来、日本基督教団に籍を移し現在に至っております。

信仰について自覚的に追求した大学時代、私は福音派系の学内キリスト教活動、教団出身の学生が主に参加するキリスト教活動、エキュメニズムを標榜する大学教会のチャペルのいずれにも積極的に参加、それに加えてリ

ベラルでアカデミックなキリスト教を講じる大学の講義にも出席し、日曜日は華人教会で一日を過ごすという生活で、幼少時から漠然と持っていたカトリック的信仰も相まって、全てが互いに相容れずに消化不良の状態です。個人的にはかなり苦しんだ部分もありましたが、振り返ってみれば、いろいろなキリスト教があるのだということを体当たりで学んだ貴重な時期でした。

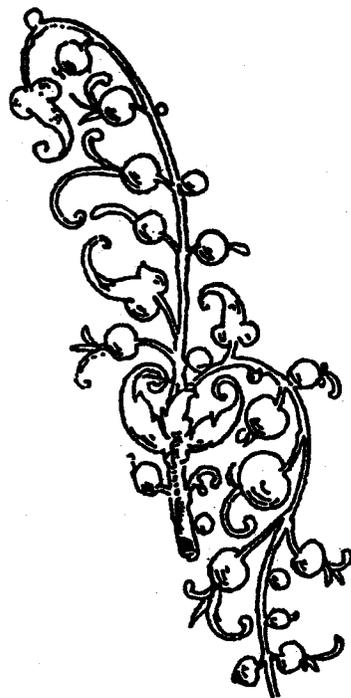
英文学専攻で学部を卒業後、修士課程では、日本による植民地支配と戦前の日本教会の関係を知りたいと思い、専門をまったく変えて、日本統治期の朝鮮にあった日本人教会の歴史について、教会史を一からひも解きながら論文を書くこととなりました。その後博士課程では、同様に日本統治期の、今度は台湾における日本人教会、というテーマで論文を執筆しました。

博士号取得後は子育てで忙しかったこともあり、細々と博士論文に関連した発表や論文執筆をつづけていましたが、日本史・台湾史・キリスト教史のいずれの分野でも知識が欠落しており、一体自分には専門分野というものがあるのだろうかと思いでいました。そのような中、思いがけず 2008 年より一年間、米国の神学院で自由に研究を行う機会が与えられ、17 世紀以降の欧米のキリスト教や海外宣教の歴史について聴講するなか、あたかも急に幕が開いたように 2000 年にわたるキリスト教史のイメージができれば、自分の究極の学問的関心はキリスト教史そのものにあっただと強く認識しました。と同時に、それまで関心はあってもあまりにも膨大で自分の手には負えないと思っていた、「キリスト教と植

民地支配」のテーマの研究史を掘り起こす作業にも着手することができました。

さらに不思議なことに、帰国後、恵泉女学院大学で「キリスト教文化史」を講じることとなり、不肖ながら 2000 年のキリスト教について勉強しているわけですが、そのスケールの大きさやダイナミックさにはハマっていく一方です。ここ明治学院大学キリスト教研究所では、滞米中に中途半端で終わってしまった「キリスト教と植民地支配」の研究史について、少しまとまった形で発表・執筆することが最初の目標であり、その後は台湾キリスト教史の中の個別のテーマについて、地道に掘り下げていければと思っております。二年間、どうぞよろしくお願いいたします。

たかいへら一・ゆき (客員研究員)



植村歴史散歩のこと

吉馴明子

昨年11月23日、おじさん2人、おばさん3人が朝10時新橋旧停車場跡に集まった。恵泉女学園大学での公開講座「植村正久」にサポーター参加の岡和田常忠先生が植村歴史散歩をしてくださることになったのである。

スタート地点の新橋旧停車場は、開業直前の写真を元に再現された重厚な石造りの駅舎玄関口である。その裏側には駅舎基礎石の遺構を生かしたレールや0マイル標識がある。見学するうちに私たちも明治初年へタイムスリップしたようであった。そこから第一京浜を渡って一本目の日陰通りに出たら左へ曲がり、品川方面に向かって進むとすぐ露月町となる。その道沿いにオーツカビルがあり、ショーウィンドーに OTSUKA 新橋 since1872 の文字が見える(新橋4丁目23の一角)。『植村正久と其の時代』の第1巻についている切り絵地図を開くと、日陰通りに面して「植村啓次郎」(遠山家からの養子、本来なら正久の父榊十郎であるべきだが)の名が入った家がある。正久は旗本植村家の長男として幼少期をここで過ごしたことになる。隣に遠山金四郎(遠山の金さん)宅があり、この一角を靴屋2代目の大塚岩次郎が遠山家から買い取ったとのことである。一帯は古地図では「松平陸奥守」などの名が並ぶ武家の居住地である。日陰通りの反対側は店や庶民の家だったらしく、古地図には名前が入っていない。露月町は武家と商家の境界にあたり、いわゆる上屋敷ではないとのこと。実は岡和田さんは、散歩の下見に行き大塚製靴本店ビル

が植村家跡であることを発見されたのだ(大塚製靴のHPには、沿革や明治の商店の絵が掲載されている)。

田町駅近くの港郷土資料館では特別展「江戸図の世界」が開催中で、作られた時期も大きさも違ういくつもの古地図を見ながら、江戸城を中心とした街の姿に思いをはせた。植村が住んでいた露月町から江戸城まで、遠くはない。「江戸城での攻防を肌身に感じて生活していたはずだよ」と岡和田先生が言われる。そうかもしれないなあ、でもその頃はまだ小学校下級の年だけど…。この近くのパン屋でお昼に。一休みの後、いったん「札の辻」交差点に戻る。幕府の高札(布告板)が建てられた場所である。すぐ近くの「西郷・勝両氏会見の地」記念碑を見てさらに歩くと、次は、元和キリシタン遺跡である。海で杭につるして棄教を迫る拷問をし、その遺体が埋葬された場所らしい。植村が日本伝道論でザビエルによってもたらされたカトリック宣教に触れているのは、この場所を清正公参りで通ったからかなとも思う。(注:先日、協力研究員のピノ・マラスさんから、ブラウンが新井白石のキリシタン史の英訳を雑誌に掲載していたと伺った。)キリシタン遺跡のある丘へ上がると一帯にはお寺が多く、幕末にはそのお寺にオランダ大使館やフランス公使館が置かれて、開国交渉の行方を見守っていたという。

このあたりで私の脚がパンク、ちいバスで2駅、やっと清正公覚林寺についた。加藤清正公像をまつる清正公堂と毘沙門天を祀る日蓮宗の寺の本殿が並んでいる。お参りするわけではないので、横の口から入って見学。正門の横には日蓮特有の「南無妙法蓮華

経」と書かれた石塔が立っている。「日蓮の字は必ずこう踊ってるんです。下へ行くほど広がってね」「植村は踊らないんですよ。だから日蓮じゃなく法然なんです」と、清正参りの信心を日蓮と関連づける雨宮氏の説に岡和田さんは異論を提出された。「清正公は、勝ち守りなんですよ」たしかに、植村正久が清正公に行って祈り願うのは、どんなに苦しい状況でも負けないで身を立て志を遂げることだったといっている。

この後、魚藍坂を下りて明治学院到着。もう一人のおじさんの原島正さんが宗教センター山崎さんの知り合いだったこともあって、チャペルへ入れてもらった。練習中のオルガンの音もチャペルを十二分に演出してくれた。4時半解散、色々と想像をたくましくした一日であった。

よしなれ・あきこ（協力研究員・本学非常勤講師）

渡辺祐子

今年度4月、震災で散乱した本の片づけがまだ終わらない研究所に、今村正夫先生、高井ヘラー由紀先生の新客員研究員をお迎えすることができました。お二人には当研究所を拠点にご自身の研究テーマを深めていただくのはもちろん、研究所全体としてもその成果をとものに分かち合うことができればと思います。それぞれのご研究については、本号に自己紹介を兼ねてご寄稿いただいたエッセイをご覧ください。おふたりのほか、巻頭言をサバティカルから戻られた永野先生にお願いし、また吉馴先生にも植村ゆかりの地の「散歩」についてお書き頂きました。お忙しい中ご寄稿くださった先生方に心より感謝申し上げます。

新しい年度早々、各プロジェクト研究の研究会が次々開かれ、6月29日には鈴木範久先生を講師に公開講演会も開催されました。150周年に向けた出版計画も船出しました。2011年度も当研究所の活動にいっそうのご協力を賜りますよう、心よりお願いする次第です。

「フランスの友人から、原発事故後の福島でキリスト教会がどんな働きをしているか、その様子を教えて欲しいと言われている」とN先生（フランス政治）からお聞きしたとき、一瞬言葉に詰まってしまいました。地震と津波による被災者を支援している教会はすぐ思い浮かぶのですが、原発事故となると出てきません。実際郡山の旧知の牧師に聞いて



てみたところ、そのような教会はないと思うという答えが返ってきました。

フランス社会におけるキリスト教の位置と、日本社会のそれとを同列に比べることなど土台無理な話です。日本の教会には原発事故の被災者支援をするほどの人手もお金もありません。でも私には、そのフランス人の発想を、日本のキリスト教の実情を知らない的外れなものと片付けることもできません。マスの単位で大掛かりな被災者支援はできなくとも、この事態をどのように受け止めるべきかを発信し、まさに預言者としての務めを果たすことはできるのではないか、そんな風に思えてならないのです。

3.11 以後世界は一変したのだと、反原発を40年来唱えてきた科学者は言いました。今後私たちは、原発事故がもたらした放射能汚染という災禍と、恐らく一生付き合っただけでなくてはならないでしょう。被爆による子どもたちの健康被害はもとより、政府・東電の事故対応が露呈した日本社会の歪みについても、私たちは考え続けなくてはなりません。復興の名のもとにうごめきつつある全体主義も気になります。キリスト教研究所は8日に原発事故に関する最初の講演会を計画していますが、この問題への関心を一過性のものでせず、今後継続して関わり続けなくてはならないと思っています。

わたなべ・ゆうこ（主任・本学教養教育センター准教授）

2011年4月-7月の研究所活動
(詳細は各チラシをご覧ください)

所員会議

第1回

日時:2011年4月27日(水)11:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

第2回

日時:2011年6月22日(水)14:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

第3回

日時:2011年7月23日(土)11:30-

場所:白金校舎キリスト教研究所

2011年度1日研究会

日時:2011年7月23日(土)14:00-

場所:白金校舎92会議室、10階大会議場

司会:渡辺祐子主任

発表①:今村正夫客員研究員

コメンテーター:植木献所員

発表②:高井ヘラー由紀客員研究員

コメンテーター:司馬純詩所員

研究会

SCA 歴史編纂 PJ

第1回

日時:2011年4月15日(金)13:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

第2回

日時:2011年6月9日(木)13:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

第3回

日時:2011年7月14日(木)13:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

SCA 定例会

日時:2011年5月28日(土)13:00-

場所:白金校舎10階大会議場

公開研究会

SCA歴史編纂PJ

第1回

「SCA(基督教学生会)と明治学院生協—SCA会員たちは如何にして明治学院生協を設立したか—」

講師:千葉明德(シャローム福音教会名誉牧師、都築ニュータウンチャペル牧師、シャローム保育園理事長)

日時:2011年4月22日(金)13:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

第2回

「—明治学院大学ボランティア活動の歴史—SCA(基督教学生会)と「筑豊の子供を守る会」」

講師:井上一志(有明教育芸術短期大学講師)

日時:2011年5月13日(金)13:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

キリスト教主義教育研究PJ

「同志社のキリスト教教育と同志社教会」

講師:佐伯幸雄(恵泉学園中学高等学校長、元同志社教会牧師)

日時:2011年6月19日(日)13:00-15:00

場所:横浜校舎横浜宗教部集会室

共催:明治学院教会

公開講演会

第1回

「内村鑑三生誕150年の課題—新版『後世への最大遺物・デンマルク国の話』—」

講師:鈴木範久(立教大学名誉教授)

日時:2011年6月22日(水)16:00-

場所:白金校舎2202教室

第2回

「被造物のうめきが聞こえる—聖書からみた福島原発事故—」

講師:上山修平(日本キリスト教会横浜海岸教会牧師)

コメンテーター:今村正夫(日本基督教団代官山教会牧師、本研究所客員研究員、本学非常勤講師)

日時:2011年7月8日(金)18:00-

場所:白金校舎1254教室

新着図書(2011年4月-7月)

・『福音と世界』No.4、新教出版社、2011。

・『福音と世界』No.5、新教出版社、2011。

・『福音と世界』No.6、新教出版社、2011。

・『福音と世界』No.7、新教出版社、2011。

・『説教黙想アレティア』No.71、日本キリスト教団出版局、2011。

・『説教黙想アレティア』No.72、日本キリスト教団出版局、2011。

・『説教黙想アレティア』No.73、日本キリスト教団出版局、2011。

・『アウグスティヌス著作集』第20巻I、(中川純男・鎌田伊知郎・泉治典・林明弘訳)、教文館、2011。

・『日本キリスト教史における賀川豊彦—その思想と実践』、(賀川豊彦記念松沢資料館編)、新教出版社、2011。(加山久夫名誉所員寄贈)

・『マリアの涙』、(ピーター・シャビエル著)、マガジンハウス、2010。(ピノ・マラス協力研究員寄贈)

2011 年度キリスト教研究所構成メンバー

所長 播本秀史

主任 渡辺祐子

【所員】

教養教育センター: 植木 献、佐藤 寧、嶋田彩司、永野茂洋、渡辺祐子

文学部: 久山道彦、斉藤栄一、播本秀史、水落健治

経済学部: 鶴殿博喜、大西晴樹、手塚奈々子

社会学部: 遠藤興一、深谷美枝、宮田加久子

法学部: 鍛冶智也、辻 泰一郎

国際学部: 司馬純詩

心理学部: 下田好行

【名誉所員】

小田島太郎、加山久夫、久世 了、柴田 有、千葉茂美、中山弘正、成瀬武史、新倉俊一、橋本茂、花田宇秋、真崎隆治、丸山直起、森井眞、山崎美貴子、吉田 泰

【客員研究員】

今村正夫、高井ヘラー由紀

【協力研究員】

石本東生、稲垣久和、岩崎次郎、岩田ななつ、岡部一興、小川智瑞恵、加藤 実、北川一明、小暮修也、小林孝吉、齋藤元子、斎藤 豊、佐々木晃、佐藤飛文、島田由紀、清水有子、鈴木 進、瀬川和雄、田中浩司、辻 直人、手代木俊一、中島耕二、原 豊、東 義也、丸山義王、宮坂弥代生、村上文昭、吉馴明子、米沢和一郎、渡辺英男、Andrew H. Ion、周東華、徐正敏、Pino Marras

【教学補佐】

納谷智子

※順不同・敬称略

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第55号

2011年7月23日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214

Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩